

## 《書評》

### 雨宮昭一著『総力戦体制と地域自治 既成勢力の自己革新と市町村の政治』 青木書店・1999年

大嶽 秀夫

一九九〇年代は日本において戦中期についての研究が飛躍的発展をみせた時期である。雨宮昭一氏はその代表的研究者である。かつ、ここで書評の対象とする一冊は、『戦前戦後体制論』（岩波書店、一九九七年）と並んで、彼の代表的業績である。

本書は雨宮氏が茨城大学教授であったころの著作である。茨城県地域を対象としているのは、そうした地の利を生かしたものである。ここで雨宮氏（現在、茨城大学名誉教授、獨協大学名誉教授）は徹底した実証を試みている。著者が使った資料は役場文書、県庁文書、町村リーダーの日記、書簡、各団体の書類、機関紙であるが、「あとがき」では「たとえば、水海道市の資料は、合併前の旧村の資料が一つの建物にトラック数台分段ボール箱にも入っていない状態で、とにかく、ゼミの学生諸君と二年近くにもわたって整理した」という。

さて著者は茨城県の緒運動をとおして、日本ファシズムの動向を探っている。日本にも「下からのファシズム」「草の根ファシズム」が存在していた、とする。とくに茨城では、血盟団事件の関与者がいたし、五・一五事件の主導者の一人橋考三郎が愛郷塾を開いていた、政治的に先鋭化した地域であった。

著者は、衆議院選挙区茨城第三区を、純農村および半商工半農の町として分析の対象としている。具体的には、その選挙区を純農村（五箇所村、玉川村）、半農半商工（真鍋村）、商工中心（水道町）の各市町村の戦前、戦中、戦後期の政治過程と政策との変化をみている。とくに大正中期の茨城県新治郡真鍋町に形成された「惜春会」の中心となった青年たちが新農村主義に傾斜していった動向を探っている。彼らは、町議会、県議会に進出し、そして大政翼賛会形成のキーマンの一人近衛内閣書記官長風見章の基底における政治的基盤でもあり、彼らは地域

の戦後の政治的リーダーにもなっていたという。

さらに、結城郡五箇村の経済更生運動を取り上げ、農村恐慌に抗して、読書会をもち、その中から、左翼的動きも出たと指摘している。水海道市域は純農村の地域も含んでいるが、ここでは激しい小作争議が起こり、地主側は暴力団を雇い、对小作の武器とした。

前述のように橋考三郎は水戸を拠点に、愛郷会を作るが、昭和七年には、二四支部、四五〇〇名の会員を擁するまでに大規模化した。

昭和一二年、「茨城県各地では華北の要所、保定城が陥落すると、水戸市で六〇〇〇人の児童が動員され小旗行進を行い、夜は市内一万人の提灯行列など、祝賀行事が行われ」た。日中戦争の戦闘は厳しく、茨城県出身者の中から四千人を越す多数の戦死者がでた。昭和一二、一三年の茨城県会は。「皇軍感謝決議」、「銃後体制の整備」など戦時色の強いものが多かった。ただし、統制には反対の姿勢をもった。

本書はこうした市町村、県レベルの動向につき原資料を駆使して明らかにし、それのみならず、それを方法的に市町村—県—国の間の相互作用と循環過程に位置づけ、そのことによってそれまで不分明であった「上から」と「下から」のファシズムの相互関係を明らかにし、同時に戦前、戦時、戦後の連続も含む関連を明らかにしたのである。このことによって現在にも意味を持ち、研究の次元を上げたといえよう。以上にみたように、本書は極めて野心的でかつ挑戦的な内容に満ちている。

なお本書の書名の一部である「地域自治」の英訳を著者はlocal autonomyとしているがregional autonomyも検討してもよいと思われる。

（京都大学名誉教授）